

＜悲華經＞の先行研究概観

武蔵野大学 仏教文化研究所 研究員

武蔵野大学 薬学部 准教授

石上 和敬

はじめに

＜悲華經＞¹に関する単著の研究として、公刊されたものでは Yamada[1968a; 1968b]、宇治谷祐顕[1969]、未公刊のものとして Weiler[1956]、Terakawa[1969]がある。Yamada[1968a]と宇治谷祐顕[1969]では、必要に応じて、それまでの先行研究に言及・紹介する箇所はあるが、＜悲華經＞研究史をまとめて概観する項目は立てられていない。Weiler[1956]は序論において、それまでの欧米の研究を中心に＜悲華經＞への言及をいくらか整理し、それを継承した形の Terakawa[1969]はそれに日本の研究を加えて紹介しているが、いずれも現代の視点から見れば、十分なものとは言い難い。

このような事情に起因するものか、＜悲華經＞研究においては、期せずして先行研究と内容的に重複する論文が公にされることも珍しくないようである。本稿では、＜悲華經＞を取り巻くこのような状況に鑑み、管見の及ぶ範囲でこれまでの＜悲華經＞研究史を大まかに概観することとする。二十年近く前に筆者も簡単に（石上和敬[1993: 22-23]）先行研究を紹介したことがあるが、本稿はそれを大幅に増補するものである。なお、＜悲華經＞については先行研究が

限られている事情を考慮し、取り上げる先行研究の範囲は、〈悲華經〉を主たる検討対象とする研究だけでなく、関連研究のうち必要と認められるものにも範囲を広げることとする。なお、日本国内における〈悲華經〉漢訳經典の受容と流布に関わる諸研究については、本稿では取り上げない。

〈先行研究紹介の方針について〉

上記の単著4点については、年代順に全体の内容を簡単に紹介する。それ以外の個別の研究については、テーマごとにまとめて紹介する。なお、校訂テキストと現代語訳の基本情報については、石上和敬[2009]に譲る。また、〈悲華經〉の漢訳二本については、本稿では次の略号を用いることとする。

秦訳：失訳『大乘悲分陀利經』（「大正新脩大藏經」第三卷、233c10-289a25）

曇訳：曇無讖訳『悲華經』（「大正新脩大藏經」第三卷、167a1-233c8）

第1項 単著としての研究（未公刊の研究も含む）

1.1. Weiler[1956]

同研究はペンシルヴァニア大学への学位請求論文で未公刊であるが、現在ではUMI Dissertation Servicesによるマイクロフィルムからの複写によって参照可能である。

同研究の中心部分は〈悲華經〉第1章と第2章の梵本校訂と英訳である。校訂（ibid., pp.1-48）に際してはDās[1898]、及び、梵語写本6本（写本(7)(8)(9)(10)(11)(12)²）を参照し、各写本の異読も詳細に示されている（ibid., pp.49-116）。なお、蔵訳、漢訳との対照は示

されていない。続いて、校訂テキストに基づいて第1章と第2章の英訳が施される (ibid., pp.117-186)。最後に、Concordance (ibid., pp.187-356) が付せられているが、単語によっては簡単な語注も添えられている。

なお、同研究は序論 (ibid., pp.viii-xlix) において、〈悲華經〉の梵漢蔵そしてトカラ語の関連資料について、先行研究を交えながら概観し、引き続いて、校訂の際に参照した梵語写本の所在情報や音韻上、文法上の特徴などにも言及している。

1.2. Yamada[1968a]; [1968b] (書評はHurvitz[1969]; Kunst[1969]; May[1970]; Weller[1971]; 宇治谷祐顕[1971]; de Jong[1972]等)

同研究はこれまで世に問われたもののなかで、最もまとまった〈悲華經〉研究と言ってよい。同研究は全体2部構成であり、第一巻「研究編 (英文ではIntroduction and Notes)」と第二巻「梵本校訂」からなる。同校訂は梵語写本6本 (写本(7)(8)(10)(11)(13)(14))、蔵訳、漢訳をも参照しながら校訂がなされており、現在のところ〈悲華經〉梵本の標準テキストになっているものである。同研究には書評も数点寄せられており、なかには梵本校訂の方針等について立ち入った検討が加えられているものもある³。

研究編では、「資料とテキスト (The Materials and the Text)」の章において、梵蔵漢等の関連資料の概観 (ibid., pp.8-20)、梵蔵漢資料の比較対照等から窺われる伝承の系譜 (ibid., pp.21-32)、そして、校訂に際しての方針等 (ibid., pp.33-58) が示される。最後に、梵蔵漢資料の章ごとの対照表が添えられている (ibid., pp.59-62)。

後半の「解説 (Commentary)」では、はじめに〈悲華經〉全体の内容の要約 (ibid., pp.63-120)、続いて、〈悲華經〉に関連するいくつかのテーマごとの考究がなされている。まずは、〈悲華經〉に多

くの仏菩薩が登場することに鑑み、原始仏典以来の仏陀観の展開について過去仏、未来仏、現在他方仏などに分けて分析される (ibid., pp.121-139)。次に、〈悲華經〉では多くの仏の誓願や彼らに対する授記が認められることを受けて、諸仏典に見られる授記と誓願の系譜が明らかにされる (ibid., pp.140-166)。さらに、多くの要素を包含した〈悲華經〉の成立について論じており、著者は〈悲華經〉の編纂年代を紀元200年から400年の間との見解を提示している。

最後には、〈悲華經〉の一方の主役であり、先行研究の蓄積も多い阿弥陀仏について詳しく検討されている。まずはamitābha, amitāyus, amṛtaśuddha, amitaśuddha等の阿弥陀仏のインド語原語の問題 (ibid., pp.175-196)、続けて、〈悲華經〉に見られる阿弥陀仏誓願文を〈無量寿經〉の誓願文と対照しつつ、個々に解説している (ibid., pp.197-233)。また、阿弥陀仏同様、〈悲華經〉に見られる阿閼仏誓願文についても、〈阿閼仏国經〉などと比較しながら、考察が加えられている (ibid., pp.234-250)。

以上が同研究の大まかな概要である。

1.3. Terakawa[1969]

同研究はWeiler[1956]を継承する研究であるため、全体の体裁もWeiler[1956]にほぼ準じている。やはりペンシルヴァニア大学への学位請求論文であり、未公開であるが、UMI Dissertation Servicesによるマイクロフィルムからの複写によって参照可能である。

同研究の序論では梵蔵漢資料の関連情報等をWeiler[1956]を受けつつ、かつ、邦文の諸研究をも加えながら論じている (ibid., pp.xxix-lvii)。

同研究の中心部分は〈悲華經〉第5章と第6章の梵本校訂と英訳である。校訂 (ibid., pp.1-81) に際してはDās[1898]、及び、梵語写

本7本（写本(7)(8)(9)(10)(11)(12)(13)）を参照し、各写本の異読も丹念にチェックされている（*ibid.*, pp.82-177）。なお、Weiler[1956]同様、蔵訳、漢訳との対照は示されていない。続いて、校訂テキストに基づいて第5章と第6章の英訳が施される（*ibid.*, pp.178-307）。英訳にはWeiler[1956]より詳しく訳注が付されているが、Weiler[1956]に付されていたConcordanceは同研究には見られない。

1.4. 宇治谷祐顕[1969]（書評は吉元信行[1970]）

同研究は国内で一冊の本として公開されたものとしては唯一の＜悲華經＞研究書である。＜悲華經＞梵語原典（Dās[1898]と梵語写本数点）に基づく、永年にわたる著者の諸研究を集大成したものであり、「この研究についての先輩諸師によるある程度まとまった既往の研究成果や指導書もほとんど皆無と言っても過言ではなかろう」（同書、p.2）というそれ以前の状況にあって、また、その後も今日に至るまで単著としての＜悲華經＞研究が現われていない中、同書の有する意義は今日でも決して小さくはない¹。

同研究の概略は次の通りである。第一章と第二章では＜悲華經＞全体の内容的な梗概と梵蔵漢資料の情報などが紹介される（同書、pp.1-30）。第三章と第四章では、＜悲華經＞に見られる阿弥陀仏関連の内容が考察される。特に、阿弥陀仏誓願文については、各願文ごとに梵蔵漢テキストと各々の和訳を挙げ、その後に問題箇所について詳細な検討がなされている。この部分が同書の中心であり、＜悲華經＞研究史においても優れた意義を有する部分であることは間違いない（同書、pp.31-145）。なお、第四章には＜無量寿經＞類の阿弥陀仏誓願文との願文ごとの対照表も付されており便利である。第五章では、＜悲華經＞に登場する阿弥陀仏以外の諸仏・諸菩薩に焦点を当て、特にその誓願文を中心に検討を加えている。たと

えば、文殊師利菩薩の誓願を他の関連經典と比較しつつ論じる、といった内容である。また、〈悲華經〉では阿弥陀仏誓願文と類似する内容が光明豊王仏の誓願にも看取されるため、同仏の誓願文も梵藏漢テクストとその和訳を挙げつつ詳しく検討されている（同書、pp.146-220）。第六章は〈悲華經〉の主題とも言える釈迦の穢土成仏、五百誓願に関わる内容を取り上げるが（同書、pp.221-261）、阿弥陀仏等の検討に比すると、簡単な検討に留まっている。また、同書の末尾には「附録」として、〈悲華經〉第3章「大施品」の梵本からの和訳が掲載されている（同書「附録」 pp.1-54）。

なお、本稿では後に、宇治谷の諸研究をテーマごとに紹介することになるが、それらの多くは、この宇治谷[1969]に繋がる内容である。

先述した通り、国内唯一の〈悲華經〉研究として同書の持つ意義は甚だ大きいものがあるが、四十年の歳月が経過した今日、次のような批評を加えることは赦されるであろう。たとえば、同書は全体として梵語原典に基づく研究であるが、依拠した梵語テクストがしばしば不備を指摘されるDās[1898]（及び、写本数本）であることが、まずは留意されなくてはならない。Yamada[1968b]の翌年に出版されたという事情を考慮すれば、この点で著者の非を責めることは適当ではないが、我々においては、Yamada[1968b]やその後利用可能となった写本類を参照しながら、同書を再検証することが求められるであろう。また、同書の中心部分とも言える阿弥陀仏誓願文に対する精緻な考察に比して、他の章の考察において物足りなさを感ずる箇所も見受けられる。たとえば、第一章の梗概と要旨の部分⁵、また、第六章の釈迦仏の考察等においてそれが顕著であろう。

第2項 <悲華經>の内容要約と解題

2.1. 主な辞典・カタログ類に見られる内容梗概（原則として複数頁に及ぶもの）

Mitra[1882: 285-290]はカルカッタのベンガル・アジア協会（The Asiatic Society of Bengal）所蔵写本（<悲華經>梵語写本(11)）のカタログであるが、五頁にわたって、同写本に基づいて<悲華經>の内容が章ごとに要約されている。Weiler[1956: xvii]によれば、西洋の言語によるものとしては、最も充実した内容要約とされる⁶。但し、<悲華經>の中で最も分量の多い第4章の説明が他章と比べて短く、第4章のクライマックスとも言える釈迦如来五百願への言及が見られないなど不自然な点も散見される。

赤沼・西尾[1931]は「悲華經の梗概」として曇詵の内容をまとめた部分をその中心とする。その他に「悲華經の名義について」「悲華經の諸本伝訳」「悲華經の成立に就て」「悲華經と浄土教」なども別項目としてまとめられている。なお、赤沼・西尾[1931]の内容は『仏書解説大辞典』第九卷（東京：大東出版社、1935）125-129に「悲華經」の項の説明として再録されている。

西尾京雄[1934]は「本經の梗概」として秦詵の内容をまとめた部分を中心とする。その他に「本經の名義」「本經の諸本・伝訳」などの項目も立てられている。

望月信亨[1974]は、曇詵の内容を各品ごとにまとめ、同經の特徴、秦詵、梵本、藏訳等の情報にも言及している。

藤田宏達[1977]は、梵本の内容を章ごとに簡潔にまとめ、<悲華經>全体の主題や諸特徴についても要点を記している。

山口務[1997]には、<悲華經>の簡単な内容紹介と資料紹介、及び、「ハイライト箇所」として釈迦如来五百願の冒頭部分の趣意がまとめられている。

2.2. その他

Isshi Yamada, “The summary of the Karuṇāpūṇḍarika” (= Yamada [1968a: 63-120]) は先述したYamada[1968a]の一章である。梵本に基づき、各章ごとの内容がまとめられており、＜悲華經＞の内容紹介の中で、最も詳細なものと言える。

岩本裕「悲華經 解題」(＝岩本裕[1974: 205-209; 212; 232; 280; 300]) は＜悲華經＞の抄訳に付せられた解説である。タイトルや資料の情報等、簡単な全体的説明の他に、抄訳の理解を助けるために、梵本に基づき、各章ごとの概要がまとめられている。

望月信亨[1930: 336-344]は、原始仏典にその起源を探り、また、阿弥陀仏以外の諸仏の浄土までも射程に入れた、浄土教に関する総合的研究であるが、その一部に＜悲華經＞も取り上げられている。同研究では、最初に曇訳に基づきその内容を要約し(四頁程度)、続けて、經全体の趣旨を簡単にまとめた後、＜悲華經＞の説く阿弥陀仏の本生話が『大阿弥陀經』のそれと関係が深いこと、及び、阿弥陀仏や釈迦仏の師仏である宝蔵如来の名義の由来について詳しく検討している。なお、同研究の内容は、ほぼそのままの形で、望月信亨[1946: 236-245]に再録されている。

渡辺愛子[1985]は、『仏教説話大系』(全三十冊)のために、曇訳に基づき、そのストーリーの概略を約六十頁ほどの読み易い物語風にまとめたものである。一般読者が＜悲華經＞への関心を惹起するための貴重な業績であろう。

第3項 テキスト関係

前述の通り、＜悲華經＞梵蔵漢資料の諸情報、校訂テキスト、及び、現代語訳の基本情報については石上和敬[2009]にまとめたので、本稿では、先行研究の中でも、梵蔵漢のテキスト校訂を含む研究や、

テキスト補正などに関わる研究を補足的に紹介する。なお、合わせて本稿の第9項も参照されたい。

宇治谷祐顕[1962]は、＜悲華經＞の梵蔵漢テキストを比較対照した際に浮かび上がるいくつかの問題点や、梵本（Dās[1898]）と京都大学所蔵写本とを対照させて、Dās[1898]の問題点や特徴を考察した小論である。

Inagaki[1964]は、＜悲華經＞の簡単な概要紹介を行なった後、＜悲華經＞無諍念王の阿弥陀仏誓願文について、各願文ごとに、梵本、蔵訳（ナルタン版と北京版を参照）、両漢訳を掲載し、さらに、梵本からの英訳を付した研究である。梵本については、Dās[1898]に拠りながら、龍谷大学所蔵写本（写本(16)）を参照しつつ訂正を施したとされる。

成松芳子[1976]は、＜悲華經＞梵蔵漢テキスト、及び、新たに入手した梵語三写本をも加えての本格的な文献学的研究の端緒を開くことを企図した論文である。同論文では、手始めに＜悲華經＞第5章の冒頭に列挙される菩薩三昧名を取り上げ、類似する菩薩三昧名を列挙する般若系経典等とも対照させながら、Yamada[1968b]当該部分の補正を試みている。同論文は＜悲華經＞と般若系経典との関係を指摘した点でも注目される。また、梵蔵漢テキストを比較検討する場合、秦訳を重視すべきことも強調される。次の通り。「(秦訳は曇訳に比べて＝筆者取意)よりリテラルで、欠落、意識といったものもさほど認められないから、例外もあるにせよ、これが最も信頼できる資料となろう」(成松芳子[1976: 195])。

山田龍城[1959: 101]は、「諸経集類」の一経として＜悲華經＞を取り上げ、その梵蔵漢資料について簡単に整理・紹介している。

Oguibénine[1996]は、仏教梵語(sanskrit bouddhique, Buddhist Sanskrit)の概略や仏教梵語をめぐる諸議論を「序論」で検討した後、いく

つかの仏教梵語のテキストを例文として掲げ、それに対して詳細な注を施した研究である。例文の中に〈悲華經〉テキストも四箇所が取り上げられており (KP,221,10-223,12; KP,376,11-380,3; KP,407,12-408,13; KP,409,12-410,8)、テキストに対して、音韻、サンディ、韻律、語形、シンタックス、語彙、等々の項目に分けて詳細な注が付されている (Oguibénine[1996: 185-201])。なお、所引テキストはYamada[1968b]をそのまま掲載している⁷。

Tropper[2005: 53-54; 60-61]では、チベット中南部の都市ギャンツェ (Gyantse) の僧院ペルコル・チェデー (dpal 'khor chos sde) にある有名な仏塔クンプム (sku 'bum) の内部に、〈悲華經〉の内容を要約したチベット語銘文が2点ほど見られることを紹介している。同書からはチベット銘文自体の全容は知られないが、Ricca & Lo Bue[1993: 209]に銘文の一部を判読できる写真が掲載されている。

第4項 〈悲華經〉の漢訳に関する研究

西尾京雄[1931]は〈悲華經〉全体の内容梗概と、〈悲華經〉の諸種テキスト、なかでも漢訳事情の検討、及び、〈悲華經〉に見られる仏身観を扱った論考であり、早い時期に〈悲華經〉の全体像を紹介した意義のある論文であろう。なかでも、漢訳について、諸経録で〈悲華經〉に四漢訳 (現存は二漢訳) があったとされる点についての分析が成されている。失われた第一訳とされる「閑居經」(一卷、または十巻) について、阿弥陀仏の前身である無諍念王 *aranemin* の訳語ではないか、したがって、「閑居經」は〈悲華經〉全体の漢訳ではなく、無諍念王に関する部分のみを訳した別行經ではないかと推測している点は注目される。

真田有美[1956]も〈悲華經〉全体の梗概と梵藏漢諸本の紹介を行なうが、とりわけ、経録に基いて訳経事情の問題を詳しく紹介して

いる点、また、梵蔵漢テキストの章、品ごとの対照表を掲載している点などが注目される。

真田有美[1957]は〈悲華經〉の一部の内容を抄出した別出經に関する研究である。諸經錄によれば、〈悲華經〉には二十種にも及ぶ別出經が存在したとされる。同論文では、經錄ごとの〈悲華經〉別出經の記述を整理している。また、別出經自体は現存しないが、『經律異相』に〈悲華經〉の別出經が五經ほど引用されていることから、それらの別出經と現存漢訳二訳との対照を行い、訳語等の検討を経て、それらの別出經が曇詵からの抄出である可能性が高いことを明らかにしている。

常盤大定[1973]は後漢から宋齊の時代にかけての訳經を整理した浩瀚な研究であり、〈悲華經〉を個別に扱った研究ではないが、その中に、〈悲華經〉の漢訳についても諸經錄に拠りながら複数回、言及されている（同書の索引参照）。

第5項 〈悲華經〉に説かれる阿彌陀仏に関連する研究

5.1. 〈悲華經〉と〈無量寿經〉との阿彌陀仏誓願文の比較検討

〈悲華經〉に説かれる阿彌陀仏誓願文と〈無量寿經〉の阿彌陀仏誓願文との比較検討は、〈悲華經〉研究の中でも最も先行研究が豊富な分野である⁸。この分野の研究は、〈無量寿經〉の阿彌陀仏誓願文に軸足を置いた研究と、〈悲華經〉の阿彌陀仏誓願文に軸足を置いた研究との双方において試みられているが、特に浄土經典に基づく古くからの浄土教研究の膨大な蓄積を前にしたとき⁹、前者の諸研究を涉獵することは事実上不可能であり、その言及の内容も概ね似通ったものであることも多い。それ故、本項では、後者の〈悲華經〉を中心とした研究の中から当該分野をテーマとするものを紹介する。なお、前者の諸研究についても必要に応じて本項において

紹介することになる。

管見の限りでは、近代以降、両經の阿弥陀仏誓願文を比較対照した研究としては、加藤智学[1919]が嚆矢となろう。同論文では、『平等覺經』『無量壽經』とく悲華經の両漢訳とについて、阿弥陀仏誓願文を個々に比較対照し、両經で相違の見られる箇所、たとえば、浄土での声聞・縁覺の二乗の存否など¹⁰、有意の差異と考えられる箇所について詳細な考究がなされている。両經の阿弥陀仏誓願文の比較を通して、同論文では、く悲華經のほうがかく無量壽經よりも後代の成立と見なしている。たとえば、次の通り。「二十四願經の後に四十八願經あり、而して更に其の四十八願を發展せしめて浄土に於ける成仏利生の最勝最高の誓願たらしめ、以て釈尊穢土成仏の五百大願の理想に対映せしめたのであった」（加藤智学[1919: 49]）。なお、同論文は漢訳經典のみに基づいた研究のようである。

加藤智学[1919]に続いて望月信亨[1922]が世に問われた。同論文も漢訳經典同士の比較対照に基づく研究のようであるが、誓願文以外の本生説話なども勘案しつつ、く無量壽經類の中でもまず『大阿弥陀經』『平等覺經』とく悲華經との関係に着目し、『平等覺經』に「改新拡張を加えた」のかく悲華經であり、魏訳『無量壽經』はく悲華經を「更に改新を加えた」ものと推定している。つまり、望月信亨[1922]では、四十八願系の後期無量壽經よりもく悲華經のほうがかく時間的に先行するという見方を提示しており、他の諸研究とは異なる立場に立つ点で注目される。しかしながら、望月信亨[1930: 592-596]では、両經の阿弥陀仏誓願文をより詳細に比較しながら、「二經の前後は定め難いが」と断わった上で、く悲華經の諸願が「皆無量壽經に就いて改修を加えたことを証するものと見るべきようである」として、魏訳『無量壽經』よりく悲華經を後代のものと推定するに至っている。なお、望月信亨[1930: 597-603]

には＜無量寿經＞諸本と＜悲華經＞曇詵との阿弥陀仏誓願文の対照表が掲載されている。

戦後の早い時期にこのテーマを扱った論文として明石恵達[1953]が挙げられる。同論文は、＜無量寿經＞の阿弥陀仏誓願文について、梵蔵本と五種の漢訳の成立の順序に焦点を当てて比較検討したもののだが、＜悲華經＞の阿弥陀仏誓願文もその検討の列に加えられている。＜悲華經＞阿弥陀仏誓願文の成立順序については、「其に（＝＜悲華經＞、筆者注）出す阿弥陀仏の本願は、三十六願經に依りつつ、四十八願經を参考して、前段三十六願と、後段十二願の四十八願となすもので、唐訳原本と共に後期の所出と見ねばならぬ」（明石恵達[1953: 12]）と述べている。なお、同論文には、＜無量寿經＞諸本と＜悲華經＞曇詵に見られる阿弥陀仏誓願文の個々の対照表も掲載されている。また、＜悲華經＞の梵本についても二箇所を原文を示しながら引用している。

梵本に依拠した両經の阿弥陀仏誓願文の本格的な比較研究は、宇治谷祐顕の一連の研究を待たなければならなかった¹¹。宇治谷はDās[1898]と梵語二写本、及び蔵訳をも参照しながら研究を遂行した。宇治谷の一連の研究は宇治谷祐顕[1969]に集大成されており、同研究については先述したが、ここでは、宇治谷祐顕[1969]に結実していくそれ以前の当該テーマに関わる個々の研究を概観しておく。宇治谷祐顕[1954]は宇治谷によるおそらく最初の＜悲華經＞に関する論文であろう。同論文では、まず、それまでの両經の阿弥陀仏誓願文の比較対照が漢訳に依拠したものであった事情に鑑み、梵本中心の研究の必要性を指摘する。同時に、その不備を認識しての故か、Dās[1898]の更なる校訂の必要性にも言及する。その後、限られた紙数の中で、＜悲華經＞の阿弥陀仏のいくつかの誓願について、両漢訳と対照したり、＜無量寿經＞の誓願文と比較するなど、

その後の本格的研究に向けての先鞭が付けられている。なお、同論文において、すでに、両經の前後関係について、次のように述べている。「主として後者（＝＜悲華經＞、筆者注）の梵文願事の体裁から類推すると、どうも前者（＝＜無量寿經＞、筆者注）の願事が基調となって、よく整理按配せられ、しかもそれに際してはそこに説かれる願事数にまで符合せしめんとした斯經頌者の意図する若干の臭が窺われるように思われる」（宇治谷祐顕[1954: 188]）。

次に、宇治谷祐顕[1957]において、宇治谷は梵本に依拠した両經の誓願文の本格的な比較研究を発表することになる。その内容は、はじめに＜無量寿經＞系の阿弥陀仏誓願文の全体像を簡単に示し、かつまた、＜悲華經＞梵本と秦訳との各願文ごとの対照表を提示する。続いて、「〔二〕梵本悲華經の阿弥陀仏本願文」と題する第二部において、全誓願文について＜悲華經＞梵本の原文と和訳、及び、梵語二写本との異同を示している。続いて「〔三〕悲華經に説かれる阿弥陀仏本願の諸問題」と題して、第二部での作業に基づいて、＜無量寿經＞系の誓願文と＜悲華經＞のそれとの相違する部分などについての詳しい検討が成されている。両經の阿弥陀仏誓願文の比較を通して、「斯經（＝＜悲華經＞、筆者注）所説の本願はそこに説かれる願文願事の体裁及びその内容からのみ類推する場合は、「寿經」所説の本願を基調とし、これに依拠しつつ、より良く整理改修を企てたものであることを知り得た」と結論付け、＜悲華經＞が＜無量寿經＞よりも後代の成立であることを明らかにしている。

宇治谷祐顕[1965a]では、宇治谷祐顕[1957]に発表した＜悲華經＞梵本の阿弥陀仏誓願文を蔵訳とも綿密に対校した上で若干の梵本の訂正を施し、同論文の後半では、＜悲華經＞の阿弥陀仏誓願文が、無諍念王の誓願の他に王の第七王子善臂（将来、光明豊王仏となる）の誓願にも看取されることを示している。つまり、＜悲華經＞

には、二種類の阿弥陀仏誓願文が見られることを指摘している。宇治谷祐顕[1965]は、宇治谷祐顕[1965a]を発展させた形の研究で、第七王子善臂の誓願文をく無量寿経>やく悲華経>の無諍念王の誓願文と比較検討することを主眼としている。個々の願文ごとに、く無量寿経>類やく悲華経>無諍念王の誓願との対照表が示され、その後、善臂の誓願の特徴が考察される。善臂の誓願は、「此経（＝く悲華経>、筆者注）所説の阿弥陀仏本願文よりも猶一層簡潔にして、最も要領よく再調整せられた本願文である」と結論付けている。

以上が、宇治谷による、両経の誓願文の一連の比較研究の概要である。

次に、成松芳子の阿弥陀仏誓願文に関する二点の論文を見てみたい。成松の論考はいずれも、梵本についてはYamada[1968b]に依拠しており、その点で、宇治谷の諸研究よりも梵本に関する限り広い視野からの研究とすることができる。成松芳子[1975]は、く無量寿経>とく悲華経>に見られる阿弥陀仏誓願文のうち、阿弥陀仏浄土への衆生の往生に関わる、いわゆる「生因願」を詳細に比較検討した論文である。検討の結果、く悲華経>の生因願には、く無量寿経>類には見られた「念仏」への言及を欠いている点を明らかにし、この点で従来の両経誓願文の類同視に対して、く悲華経>の願文は「『寿経』とはより遠いものであろう」との指摘もなされている。

成松芳子[1975a]は、く無量寿経>とく悲華経>の阿弥陀仏誓願文の比較から、く悲華経>のみに見られる三願（無有二乗、滅後得忍、滅後転女）の背景を考察し、後半では、阿閼仏国経なども引きながら、く悲華経>の女性に関わる願文に考察を加えている。成松芳子[1975]；[1975a]、いずれの論考においても、く悲華経>の願文はく無量寿経>の阿弥陀仏誓願文を踏襲、もしくは、一部に変容を加えたものとの見方を明確に提示しているが、その変容の特徴について

も、「浄土における清浄性の徹底推進による間接的否定的変容、および救済対象の拡大大悲利他性の高調による直接的積極的変容、の二面を認めうる」（成松芳子[1975a: 199]）のような言及がなされている点で注目される。

長島尚道[1981]は＜悲華經＞と＜無量寿經＞の阿弥陀仏誓願文を比較対照した論文である。個々の願文ごとに＜無量寿經＞系と＜悲華經＞の梵蔵漢の対照表を作成し、その相違する部分を明らかにし、最後に、＜悲華經＞梵本の阿弥陀仏誓願文の和訳を施している。両經の先後関係については、各誓願の対照の結果、『悲華經』所説の本願は『無量寿經』系四十八願を基に構成したものであろう」と推測している。なお、全般的に明快な論文であるが、先行研究との関係等が不分明なところも多い。

香川孝雄[1969]は各種仏典に見られる阿弥陀仏の本生話を視野に入れつつ、特に、＜悲華經＞に見られる無諍念王本生に検討を絞った論考である。＜悲華經＞の内容梗概をまとめ、引き続き、＜無量寿經＞と＜悲華經＞の阿弥陀仏誓願文の個々の対照表を宇治谷祐顕[1957]を参照しながら提示し、その相違部分に若干の考察を加えている。同論文での、両經の誓願文の考察については先行研究の成果に負うところが多いようであるが、『大阿弥陀經』等の＜初期無量寿經＞に説かれる阿弥陀仏の入滅と、その補処としての観音、勢至の成仏について、＜悲華經＞に同様の主張が見られる点の指摘は注目される。

以上、＜無量寿經＞と＜悲華經＞との阿弥陀仏誓願文の比較対照を主なテーマとした諸研究を概観した。

5.2. 阿弥陀仏に関連するその他の研究

はじめに、阿弥陀仏の本生話を中心とした研究を紹介する。

加藤智学[1916]は「阿弥陀仏の因源」をテーマとした浩瀚な研究である。同研究では阿弥陀仏の因位や菩薩としての願行に言及する関連經典を博搜しているが、その中で、〈悲華經〉の無諍念王説話やその後の歴劫修行の過程などが詳述される。同研究は〈悲華經〉を中心的に扱った研究ではないが、阿弥陀仏に関連する諸仏典を扱った代表的研究の中では〈悲華經〉への関心が高い点、及び、その後の加藤智学[1919]等、〈悲華經〉と〈無量寿經〉との阿弥陀仏に関する比較研究の淵源となった可能性も否定できないことなどから、本項で敢えて紹介しておきたい。また、同研究では、〈無量寿經〉漢訳のいわゆる五存七欠の七欠の一經と同名の『無量寿如来至真等正覺經』の全文を掲げ¹²、同經が〈無量寿經〉と〈悲華經〉とを合揉した觀のある興味深い經典であることを指摘している点も注目される。

この他に、阿弥陀仏の本生話に関わる研究として、宇治谷祐頭[1968]が挙げられる。同論文は、〈悲華經〉の阿弥陀仏本生話の大意を示した後、阿弥陀仏の前身、無諍念王（Aranemin）の語義、及び、無諍念という名称の背景等に分析を加え、さらには、〈悲華經〉の阿弥陀仏本生話の構想がいかなる先行經典に素材を採ったものかについて考察を加えている。最後の点については、先行研究にも拠りながら、『増一阿含經』との関連等を指摘している。

次に、宇治谷祐頭[1976]は、〈悲華經〉に説かれる各種の浄土に光を当てた研究である。その内容は、〈悲華經〉における「浄土」の原語やその漢訳語の問題、さらに、阿弥陀仏の浄土名に関する詳しい考察のほか、阿弥陀仏以外の様々な浄土も紹介され、最後には、釈迦仏の穢土成仏と対配される〈悲華經〉の浄土の特質が明らかにされている。本研究は、〈悲華經〉の浄土という側面に照射した研究として特筆されるであろう。

阿弥陀仏関連の研究として、齊藤舜健[1998]を最後に挙げておきたい。同論文は阿弥陀仏の寿命に焦点を当てた研究であるが、＜無量寿経＞類のみならず、＜悲華経＞にも注目している。＜悲華経＞で、阿弥陀仏が般涅槃すること、すなわち、その寿命に限りがあるとされることが、また、観音・勢至の二菩薩がその法灯を継承するとされている点などを、『大阿弥陀経』との類似に目配りしながら紹介している。梵本等の＜後期無量寿経＞よりも、『大阿弥陀経』等の＜初期無量寿経＞と＜悲華経＞との親近性を指摘している点で、香川孝雄[1969]同様、示唆に富む論文である。

第6項 ＜悲華経＞の釈迦仏に関わる研究

成松（紺矢）芳子[1983]は、＜悲華経＞の主題である釈迦の穢土成仏をいくつかの観点から考察した論文である。まずは釈迦が救いの対象とする穢土、及び、その衆生とはどのようなものかについて、主に阿弥陀仏等の浄土との対比から考察される。成松は＜悲華経＞では「衆生（存在）の濁において時間の濁がある」など「時機の不離性」が特徴であると指摘し、つまるところは、声聞縁覚の二乗と、造無間罪、誹謗正法の者たちがいる世界が穢土であり、それこそが釈迦の救いの目当てであることが明らかにされる。次に、そのような穢土の衆生を救う方途について考察されるが、基本的には「能力に応じ」「意向に随った」三乘法が重要視されること、また、他者に代わって苦を受ける代受苦などの大悲が強調される点に注目している。

以上のように同論文は釈迦の穢土成仏に正面から光を当てた数少ない研究の一つであるが、全体的に＜無量寿経＞等の浄土教の信仰理解との兼ね合いで＜悲華経＞の浄土や穢土を考察する傾向が看取されることも特徴の一つとなっている。

長島尚道[1982]と長島尚道[1985]はほぼ同内容の論文である。いずれも、前半ではく悲華經>に説かれる釈迦の穢土成仏に関わる枢要な箇所を梵本と漢訳を織り交ぜながら紹介し、後半では穢土や浄土の原語についてく悲華經>や他の大乘經典をも徴しながら考察を進めている。なお、梵本について、Yamada[1968b]に言及し、かつ、Das[1898]の不備を指摘しつつも、後者を底本にしている点、留意しておく必要がある。

この他に、石上和敬[1999]は、成松芳子[1983]にヒントを得ながら釈迦の五百誓願の諸特徴を論じたものであり、また、石上和敬[2002]は五百誓願中の特に一音説法に焦点を当てた論文である。

以上が、釈迦の穢土成仏や五百誓願を主題とする研究である。続いて本項では、釈迦信仰との関連で、以下の諸研究も紹介したい。

色井秀讓[1978]は副題「大無量寿經とその周辺」に示される通り、『大無量寿經』を中心とした研究であるが、序文において、今後の課題としてく悲華經>研究の重要性を指摘するなど、同類の研究の中ではく悲華經>に対する関心の高い研究の一つである。同研究でく悲華經>にかかわるのは、魏訳『無量寿經』や『大阿弥陀經』等に説かれるいわゆる三毒五惡段の後半部分や、く阿弥陀經>の後半部分などに見られる釈迦崇拜が、く悲華經>に説く釈迦信仰や穢土成仏説と関係するのではないかとする部分である（色井秀讓[1978: 119-123; 378-380]）¹³。すなわち、阿弥陀仏信仰を説くことを主眼とするはずの浄土經典においても釈迦信仰が見られる点に注目し、それらとく悲華經>の釈迦信仰との関係に注目するのが同研究の当該部分の論旨である。また、同研究では、く悲華經>の成立について「このように『悲華經』は二十四願本に比すれば後の成立で、もちろん法華一乗の思想よりものち、おそらく龍樹よりもなお以後の成立と思われる」とも述べている（色井秀讓[1978: 122]）。

吹田隆道[2006]は、大乘經典に説かれる阿弥陀仏等の他方仏信仰と釈迦牟尼信仰との関係を考察する文脈で＜悲華經＞に注目する、極めて示唆に富む論考である。浄土を選び取る阿弥陀仏等と穢土成仏の釈迦仏との対比という視点は、他の＜悲華經＞研究にも親しいものであるが、＜悲華經＞に言及する研究として本研究を見た場合の特徴は、釈迦仏と阿弥陀仏等が平面的に対比されるのではなく、特に、釈迦仏の捉え方において、それまでの仏陀観の展開を踏まえて、新たな価値を付与された釈迦牟尼仏として捉え直されながら¹¹、対比されている点ではなかろうか。

たとえば、阿弥陀仏と釈迦牟尼仏とが対比的に紹介される箇所に対して、次のように述べている。「ただ、この伝承を見るかぎり、すでに確立している阿弥陀仏信仰を前提として、同等、あるいはそれ以上の救済性を釈迦牟尼に持たせているのであって、釈迦牟尼信仰の再来という仏陀観の展開にともなって、それを既存の他方仏信仰の上にどのように位置づけるかという新たな動きの一つの結果と見ることができる。」(吹田隆道[2006: 4])。

Rhi[2008]は、ガンダーラ彫刻に見られる釈迦苦行像と＜悲華經＞との関係に焦点を当てた興味深い論文である。ほとんどの仏伝では成道前の苦行は最終的には捨て去られるべきものとして否定的な評価を受けていることを確認した上で、それでは、なぜ、ガンダーラの釈迦苦行像が造られたのか、として造像の背景に関心を向ける。そして、著者は＜悲華經＞に注目する。すなわち、仏伝的性格の色濃く＜悲華經＞の釈迦五百誓願の特徴の一つは、成道前の苦行が他の仏伝とは異なり肯定的に見られていることであり、のみならず、その苦行を見る者たちに功德がもたらされるとしている点である。同論文は、苦行を肯定的に見る＜悲華經＞のこれらの記述と、ガンダーラで釈迦苦行像が製作されたこととは、何らかの関係があるの

ではないかと推測している。

第7項 阿弥陀仏、釈迦仏以外の諸仏に関する研究

本項では、＜悲華經＞に登場する諸仏、諸菩薩に焦点を当てた研究について概観する。浄土を選び取る仏としては阿弥陀仏への関心が圧倒的に高いことは見てきた通りであるが、阿弥陀仏の他には、＜悲華經＞に説かれる阿閼仏に関する研究もいくつか公にされている。佐藤直実[1998]は、＜阿閼仏国經＞に現われる女性に関する記述を検討した論文であるが、検討に際して、＜悲華經＞にも＜阿閼仏国經＞と類似する阿閼仏の誓願文が見られることを指摘し、＜悲華經＞内の対応箇所について詳しく紹介している。すなわち、前述の阿弥陀仏誓願文に倣った表現をとるならば、＜阿閼仏国經＞と＜悲華經＞に見られる阿閼仏誓願文の比較対照研究と言うべきものである。

また、佐藤直実[2005]は＜阿閼仏国經＞以外の阿閼仏に言及する諸種の大乗經典を紹介する内容であるが、その中で＜悲華經＞も、阿閼仏が登場する經典の一つとして取り上げられている。＜悲華經＞に説かれる阿閼仏の誓願が＜阿閼仏国經＞の誓願とよく対応すること、及び、＜悲華經＞に見られる阿閼仏の特徴などが簡単に紹介されている。なお、佐藤直実[1998]と佐藤直実[2005]の内容は、佐藤直実[2008: 47-49; 123-138]に増補・整理された形で再録されている。

畝部俊英[1978]は称名思想をテーマとする論文であるが、その中で、＜悲華經＞に説かれる観音菩薩の誓願が注目されている。すなわち、＜無量寿經＞等では「称名(pari-kirt)」の主語は諸仏であるのに対して、＜悲華經＞の観音菩薩の誓願に到って衆生が観音の名を称えるという表現が現われる。これは、時間的に先行する「諸仏の称賛、称名」から後になって「衆生の称名」が登場することを反映

しているのではないかとの見解が示されている。

第8項 その他

宇治谷祐顕[1967]は、浄土を選び取る諸菩薩の多い＜悲華經＞のなかで、釈迦仏以外では例外的に五濁の仏国土を選び取る婆由比紐(Vāyuvīṣṇu)に焦点を当てる。婆由比紐はその名義からしてヒンドゥー教のヴィシュヌ神との親近関係が想定されることや、釈迦仏の前身である大悲比丘との関係などについても論じられている。

北條竜士[2006]は、＜悲華經＞第2章に出るDrāmiḍa-mantrapadaの語について、その語義、及び、文脈上の役割等を検討している¹⁵。

また、＜悲華經＞の陀羅尼に関連する研究として、Reis-Habito[1993]も挙げておく。同研究は、伽梵達摩訳『千手千眼観世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經』(T20,106a-111c)のドイツ語訳注研究、及びそれに依拠した考察であるが、陀羅尼に言及する経典の一つとして＜悲華經＞を取り上げ、同経の陀羅尼品に見られる陀羅尼関連の記述や、両経の対応等について論じている。(なお、同研究は主に曇訳に基づき＜悲華經＞を紹介している)¹⁶

北條竜士[2007]は、大乘経典の一つのカテゴリーとして注目されるPūrvayogaが、＜悲華經＞においても見られるという指摘である。Pūrvayogaとは＜法華經＞や＜三昧王經＞等に見られる一種の過去物語の名称であり、「ジャータカの大乗化」の一つとされているものである。＜悲華經＞においては、「第3「大施品」から第4「諸菩薩本授記品」、さらには第5「檀波羅蜜品」における釈尊の大悲菩薩時代も含めた、過去物語」をPūrvayogaと見なすことができるのではないかと指摘する。また、同論文ではPūrvayogaと誓願、及び、業との関係についても考察が加えられている。

真田有美[1963]は、スタイン将来の梵語写本全体の簡単なスケッ

チであるが、その中に、ある意味で、＜悲華經＞の思想と対立する『濟諸方等学經』の梵語写本（Sarvavaitulya samgraha sūtra）が含まれていることを紹介している。同經では、「釈迦仏の穢土成仏は過去に於ける正法誹謗の悪業因縁による結果」に過ぎないと説かれていることなどが明らかにされている。

Nattier[1991]は二部構成からなる研究であるが、第一部は、仏教の時代観、特に、正法・像法・末法として仏法が衰微していく時代観を中心とした考察である。同研究では、＜悲華經＞に言及される仏滅後の正法千年、像法五百年に関連する記述等が、何箇所かで紹介されている。また、賢劫の千仏に関しても＜悲華經＞の記述に言及している。＜悲華經＞において、このような時代観に関わる箇所を検討する際には、まずは同研究を参照しなくてはならない。

次に紹介する三点は、＜悲華經＞第5章に見られる釈迦の過去世物語に焦点を当てた研究である。

宇治谷祐顕[1971a]は、釈迦の前身・宝海梵志が五百誓願を起こした後、娑婆世界に生まれ釈迦仏となるまでの間、繰り返す輪廻の中で、大悲に裏打ちされた捨身行などを行なう様子を描く、六編の過去世物語についての考察である。各話の概要をまとめた後、各話と類同する内容を持つ仏典を指摘するなど、成立史的観点からの検討が加えられている。この点に関して次のような指摘も見られる。「(前略) 悲華經所説の釈迦仏本生説話の基本構想は、右の増一阿含經の本生話を中軸として、それに菩薩本縁經類の釈迦仏本生經としての撰集百縁經、菩薩本縁經（一切施品第二、竜品第八）、菩薩本行經卷上、大方便仏報恩經、乃至は菩薩本生鬘論所説中の仏本生經類の説話を彼此よく合融して描き出されたものと解せられてよい」（宇治谷祐顕[1971a: 75]）

Ohnuma[2007]¹⁷は、広くジャータカやアヴァダーナの中から、自

らの身体の犠牲すらも厭わない様々な捨身行にまつわる内容を抽出、分析した研究である。同研究では、同趣旨の物語として＜悲華經＞第5章に見られる三話の釈迦の過去世物語が取り上げられている。その三話とは、釈尊がアンヴァラ、ドウルダナ、ブンニャバラという王であった時の各物語である。同研究における＜悲華經＞への言及（総計十箇所程度）は、関連箇所の部分的英訳や簡単な内容紹介を中心とするものだが、ジャータカやアヴァダーナを広く鳥瞰する立場から＜悲華經＞第5章に注目した研究として、特筆されてよいものであろう。

小野玄妙[1907]は、＜悲華經＞第5章に見られる釈迦の過去世物語のうち、難沮壞王（Durdhana）と燈光明王（Pradipapradhyota）を各々主人公とした二話を、曇訳に基づき要約したものである。同論文は批判的研究ではないが、釈迦の過去世における捨身行の魅力を早い段階で紹介した点で意義ある業績といえる。

本項の最後に紹介するHahn[1985]¹⁸は、＜悲華經＞と極めて関係の深い*Mahajātakamālā* (=MJM) を研究対象とする、＜悲華經＞研究に欠くことのできない重要な研究である。MJMは、全体で50章、全9277詩節からなる大部な仏教文学であり、その内容は複数の先行文献を素材に詩文化したものと考えられている。なかでも、第10章から第42章までは、＜悲華經＞を下敷きにその内容を詩文化したことが明らかであることから、MJM自体の内容研究もさることながら、＜悲華經＞研究にとっても参照不可欠の文献となっている。Hahn[1985]はMJMの梵本テキストの校訂（全721頁）をその中心部分とするが、その他に、序章においてMJM全体の特徴や概要、及び、章ごとの内容等が整理されており、また、巻末には、MJMと＜悲華經＞をはじめとする対応文献との対照表も付されている。序説においては、当然のことながら、＜悲華經＞への言及が頻繁に登場す

る。

第9項 Yamada[1968b]に対する書評概観

本項では、＜悲華經＞研究の標準テキストとなっている Yamada[1968b]に対する書評のうち、特に、その梵本校訂に対する批評の部分を中心に紹介する。その理由は、Yamada[1968b]が現在、＜悲華經＞の標準テキストとなっているなど、斯学において占めているその重要性の故であり、また、一方では、今後、テキストをより良いものにしていくための一助とするためでもある。

de Jong[1972]は、研究編（Yamada[1968a]）やテキストの蔵訳、漢訳への優れた理解に対しては賛辞を表し、また、梵本テキストとしても、明らかにDās[1898]よりも大幅に進歩したものであるとしつつも、梵本校訂の方針にはいくつかの改善の余地を指摘している。梵本校訂に関するde Jong[1972]の指摘を以下にまとめてみたい。

まず、de Jong[1972]は、テキストの文法上の特徴(grammatical particularities)を十分に考慮に入れていないと指摘する。たとえば、校訂者は、仏教梵語の文法(Buddhist Sanskrit grammar)の融通性を重んじ、写本に見られる変則的な語形の文法的な修正を躊躇する事例が多々見られるとする。また、Edgerton[1953: xxv]の分類に従えば、＜悲華經＞梵本は、韻文部分はハイブリッド化(hybridized)されているが、散文部分については中期インド語の音韻や語形の特徴が比較的少ない、第二類に属することが明らかであるのに、校訂者に当然求められるこの点の認識が十分ではないとする。（なお、勿論、散文部分においても仏教梵語に分類される語彙は数多く見られるとされ、de Jong[1972]は、書評の末尾に、＜悲華經＞梵本に見られる仏教梵語の単語の簡単なリストを掲載している。Index IはEdgerton[1953a]に著録される単語（102単語）、Index IIは

Edgerton[1953a]に採録されていない単語（22単語）の各々リストである。）

さらに評者は次のように指摘する。現存するネパール写本には伝承の過程で蒙ったと考えられる文法的な写誤なども多く、基本的には正しいテキストを再現することは、多くの場合不可能であるが、蔵訳と漢訳の助力を得て、写本の読みを訂正することが可能な場合もある。概して、校訂者は写本の読みを信用し過ぎており、もっと蔵訳や漢訳を活用することができたのではないか。脚注において梵本と蔵訳や漢訳との異同を示しながら、どの読みを採用するかは読者に委ねられている場合も多い。また、脚注で蔵訳や漢訳との異同を示す際の方針が一定せず、恣意的な場合が多い。また、校訂者は六種類の写本を参照したとしているが、参照したとされる京都大学写本（写本(14)）の異読が脚注において示された形跡がない点¹⁹、等々である。なお、この後に、100箇所近くのテキストの修正案を列挙しており、有益である。

Hurvitz[1969]は、大部分はYamada[1968a]の概要紹介であるが、梵本校訂の方針に対しても若干の批評が見られる。Hurvitz[1969]は、「テキスト校訂(edition)と復元(restoration)は別である。校訂者はその両者の間を揺れ動いているようだ」(Hurvitz[1969: 652])と評する。Hurvitz[1969]によれば、蔵漢訳などの活用よりも、梵語写本自体を徹底して校訂し、他の写本や蔵漢の異読などは注として示せばよい、という提案である。これは、梵本校訂に対する態度としては、特に蔵漢訳の利用において、de Jong[1972]とは異なる立場ということになる。Hurvitz[1969]によれば、蔵漢訳の基ついた原典自体が推測の域を出ないものであるなどの理由から、概して梵本校訂の際の蔵漢訳への信頼が低いものようである。私見では、もし、この点で問題とされる具体例がいくつかでも提示されていたならば、読者

はさらに考察を深めることができたのではないかと、残念に思われる。ただ、蔵漢訳に引きずられ過ぎないように、という警鐘として、Hurvitz[1969]の指摘は重要であると考えられる。

Weller[1971]は、はじめにYamada[1968a]の概要を紹介し、続けて、梵本校訂(Yamada[1968b])について、数多くの具体例を引きながら、詳細な検討を加えている。取り上げられる事例数は、de Jong[1972]に次いで多いものとなっている。基本的には、混交梵語(hybrid Sanskrit)の特徴を有する梵語写本を校訂する際の方針について、サンスクリット文法との間合いの取り方などを中心に検討が加えられている。そして、時には、実際の写本の読みをどのように校訂に反映させるべきか、といった問題を、具体例に即して論じている。検討方針は、網羅的に問題箇所を列挙するのではなく、テーマごとに(たとえば、サンディの問題、子音重複の表記の問題、等々)、代表的な事例を挙げて検討するといった方法である。Yamada[1968b]を利用する場合には、Weller[1971]の指摘する個々の事例についても留意されなければならないであろう。

Kunst[1969]は、主にYamada[1968a]に対する書評であり、特にサマリーに対して高い評価を与えている。なお、梵本校訂(Yamada[1968b])に対する意見は特に見られない。

May[1970]では、十頁に及ぶ書評の大部分はYamada[1968a]の詳細な概要紹介に当てられており、梵本テキスト(Yamada[1968b])については最後にわずかに言及されるのみである。また、梵本校訂についての具体的なコメントも見られない。

<補遺：Karūṇāpūṇḍarikaの梵蔵漢資料>

石上和敬[2009]脱稿後、<悲華經>梵蔵漢資料に関して、以下の資料の複写、または情報を入手したので、この機会に補遺として紹

介する²⁰。なお、国内の古写経を中心とした漢訳諸本の補遺については、別稿を準備中であるので省略する。また、体裁や略号は石上和敬[2009]に倣うものとする。

チベット語訳写本

蔵A. タボ写本

No. 1.4.0.57 (Running No. 265) Harrison[2009: 159]

Folio No. kha 200 (1葉の表裏のみ)、9行。

特記：本写本は1葉（表裏）のみで、その範囲は、北京版（蔵P）で（Cu 309a6-310b2）に相当し、サンスクリット本では、およそ（KP,355,10-358,2）に対応する。本写本は第二次釐定以前の旧綴字の特徴を残している²¹。（たとえば、pha rold tu phyind pa(kha 200a2)などに見られるda dragの保持や、miをmyi(kha 200b8)と表記するなどのya btagsの保持など）。また、正書法において、有冠字s等が基字の真上ではなく、左側に表記されるという特徴も見られる（Tauscher[2008: xxxvii]では、“horizontal” formと呼んでいる）。本写本の写真版は、スタンフォード大学のポール・ハリソン教授より頂戴した。記して謝意を表したい。

蔵G. ゴンドウラ写本

No. Vol.22-2 Tauscher[2008: 55]

Location: Ka-Na 60a1-Ka-Na 4a1, 10行

特記：本写本も、第二次釐定以前の旧綴字や、“horizontal” formが見られるなど、タボ写本と同様の特徴を有している²²。全体の精査を終えていないが、ほぼ完全な写本である。また、現時点で未解読であるが、ウメ書体で書かれた1葉(Ka-Ma 50b)分の注記のようなものが存在する²³。なお、本写本冒頭のインド語原語の音写は、a rya

ka ru ni pun da ri ka na ma ma ha ya na su traとなっている。写本の写真版の入手については、ウィーン大学のヘルムート・タウシャー教授のお手を煩わせた。記して謝意を表したい。

(ムスタン・カンギュル)

No. 595 (mdo sil bu pa, BA PA LA (vol. 15)) Eimer[1999: 106]

特記：ムスタン・カンギュルは、カタログによって知られるのみで、現時点では写本等は発見されていない。したがって、本情報は現物の所在情報ではなく、あくまで、ムスタン・カンギュルのカタログに＜悲華經＞が含まれることを提示するのみである。タイトルは、「sñiñ rje pad ma dkar po zes bya ba theg pa chen po'i mdo」とある。なお、本情報は、Herrmann-Pfandt[2008: 44]に導かれたものである。

〔謝辞〕

本稿で取り上げた先行研究に関する情報、及び、資料収集の方法等について、多くの方々からご教示を頂いた。特にお世話になった下記の方々には、ご芳名を記して謝意を表したい。江田昭道・浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター研究員、辛嶋静志・創価大学国際仏教学高等研究所教授、北條竜士・浄土宗総合研究所嘱託研究員、堀伸一郎・国際仏教学大学院大学附置国際仏教学研究副所長。また、資料収集に際して、国際仏教学大学院大学附属図書館には、種々ご高配を賜わった。記して謝意を表したい。

注

- 1 <悲華經＞という表示は、*Karuṇāpundarika*と称される大乘經典の「諸異本のもとになった種々な原本の全体を総称する経名」として用いる

こととする。cf: 石上和敬[2009: 30].

- 2 <悲華經>梵語写本の略号については、石上和敬[2009]を参照。
- 3 たとえば、de Jong[1972]。なお、本稿の第9項で、Yamada[1968a] [1968b] に対する数点の書評のうち、主に、テキスト校訂に関わる書評を中心に概観している。
- 4 同書に対する書評にも次の通り。「著者が、この経に関する先師も指導書もなくして、かくまで詳細厳密な研究をなし得たということは、実に驚異に値することであり、また多大な意義を示すものであると言えるであろう」（吉元信行[1970: 85]）
- 5 たとえば「この章が仏書解説大辞典、悲華經の項所述の域を出ないのは残念である。序論とせず、第一章としたからには、もっと詳細な解説が欲しかった」（吉元信行[1970: 85]）
- 6 Weiler[1956]は、この他にも<悲華經>に言及する西洋の諸研究を紹介している。いずれも簡単な内容紹介の域を出ないものであるが、Weiler[1956]は未公開という事情もあるため、紹介・言及されている諸研究の書誌情報のみを以下に列挙する。なお、諸研究原典を確認した上で、Weiler[1956]の情報を変更している場合もある。

Brian H. Hodgson, *Essays on the Language, Literature, and Religion of Nepal and Tibet*, London, 1874. p.18. (org. *Asiatic Researches*, vol xvi, 1828. p.409.)

W. Wassiljew, *Der Buddhismus, seine Dogmen, Geschichte und Literature*, Aus dem Russischen übersetzt, St. Petersburg, 1860. p.167.

Hendrik Kem, *Der Buddhismus und seine Geschichte in Indien*, Zweiter Band, Leipzig, 1884. p.512.

Sir Charles Eliot, *Hinduism and Buddhism, an Historical Sketch*, vol.2, London, 1921. p.58.

Moriz Winternitz, *A History of Indian Literature*, English translation by S. Ketkar and H. Kohn, Univ. of Calcutta, 1933. pp.312-313.

E. Burnouf, *Introduction à l'histoire du Bouddhisme Indien*, Deuxième édition, Paris, 1876. pp.63-64. (orig. Paris, 1844. pp.71-72.)

漢訳に関しては、『大正新脩大藏經』の他、次の諸研究に言及している。

Prabodh Chandra Bagchi, *Le Canon Bouddhique en Chine: Les Traducteurs et les Traductions*, Tome I, Paris, 1927. pp.217-218; 239; 271.

Stanislas Julien, “Concordance sinico-sanskrite d'un nombre considerable de titres d'ouvrages bouddhiques, recueillie dans un catalogue chinois de l'an 1306, et publiée, après le déchiffrement et la restitution des mots indiens”, *Journal Asiatique* novembre-décembre 1849. pp.413; 429.

Bunyiun Nanjio, *A Catalogue of the Chinese Translation of the Buddhist Tripitaka*, (南條文雄訳補『大明三藏聖教目錄』), Oxford, 1883. pp.39; 47; 55.

蔵訳に関しては次の論考が紹介されている。＜悲華經＞とはタイトルは類似するが別本であるMahākaruṇāpundarika（梵本欠）について詳細な要約を付している。

Csoma Korosi, “Analysis of the Sher-chin --- P'hal-ch'hen --- Dkon-seks --- Do-de --- Nyang-das and Gyut”, *Asiatic Researches*, vol.xx, 1839. pp.433-436.

この他、下記の論文にも簡単な言及がある。

Herbert Guenther, “Dvags.po.lha.rje's, Ornament of Liberation”, *JAOS* 75-2, 1955. p.94.

- 7 本研究に対しては、「注」部分の体裁や内容も含めて、かなり手厳しい書評が存在する。Salomon[2000]。
- 8 本項でこの観点から紹介する研究は以下の通りである。明石恵達[1953]、宇治谷祐顕[1954]；[1957]；[1965]；[1965a]；[1969]；[1976]、香川孝雄[1969]、加藤智学[1919]、成松芳子[1975]；[1975a]、望月信亨[1922]；[1930: 592-596]

- 9 たとえば、阿弥陀仏の浄土思想を扱う代表的研究である藤田宏達[1970]、藤田宏達[2007]においても＜悲華經＞について少なからず言及がある。(両書の索引を参照)
- 10 加藤智学[1919: 45-]では、＜悲華經＞曇訳の阿弥陀仏誓願文に浄土での二乗の不在を説く点が、天親の『浄土論』の「二乗種不生」に繋がっていくとの指摘も見られる。この点は浄土教家の関心を引いたようで、赤沼・西尾[1931]などにも引き継がれ、特筆されているが、西尾京雄[1933]では一転、その解釈に疑義を呈している。
- 11 なお、宇治谷の一連の＜悲華經＞研究は先述した宇治谷祐顕[1969]に集大成されており、以下に紹介する宇治谷の個々の論文も、その大部分は宇治谷祐顕[1969]に組み込まれている。
- 12 同経については、「此の經文は先年安井広度君が写し取りて江州より予に寄せられたるものなり」とある。(加藤智学[1916: 118])
- 13 ＜阿弥陀經＞と＜悲華經＞との関係については、早くは、色井秀譲[1962: 20-21]に出る。また、色井秀譲[1986: 87-91]は、＜悲華經＞と＜阿弥陀經＞、さらには＜法華經＞との関係にも筆が及んでいる。
- 14 この仏陀観の展開については、やはり＜悲華經＞に簡単に触れる吹田隆道[2003]のほか、吹田隆道[1990]；[1993]；[1995]等の一連の研究で明らかにされており、＜悲華經＞の釈迦信仰を考える上で貴重な示唆を与えるものである。
- 15 同論文に言及はないが、ナレシ・マントリ[1971]も簡単にこの問題に触れている。
- 16 同研究に対する書評に、Fuss[1995]がある。
- 17 同書のベースとなったOhnuma[1997]（学位請求論文）をはじめ、Bibliographyに示される他の数点の論文においても＜悲華經＞への言及が見られるが、ここではそれらを包括するものとしてOhnuma[2007]のみを挙げておく。なお、同書への評価についてはvon Hinüber[2008]も参

照されなくてはならない。

- 18 同研究に対する書評に、de Jong[1988]等がある。また、石上和敬[2009: 28]も参照。
- 19 この点、研究編（Yamada[1968a]）では、写本Fへの言及が見られる。
- 20 この他、石上和敬[2009]では未見であったDās[1898]について、北條竜士・浄土宗総合研究所嘱託研究員のご好意によりその複写を入手できた。記して謝意を表したい。
- 21 西田龍雄[1987: 122-123]、Tauscher[2008: xxxvi-xxxvii]。
- 22 Tauscher[2008: xxxvi-xxxvii]。
- 23 この他にも、7葉ほどにおいて、ウメ書体による欄外の注記のようなものが見られる。

〔略号：雑誌名〕

『印仏研』：『印度学仏教学研究』

『日仏年報』：『日本仏教学会年報』

BSOAS: Bulletin of the School of Oriental and African Studies, Univ. of London

IJJ: Indo-Iranian Journal

JAOS: Journal of the American Oriental Society

JABS: Journal of the International Association of Buddhist Studies

OLZ: Orientalistische Literaturzeitung

明石恵達

1953 「阿弥陀仏摂生の本誓願に就いて」『仏教学研究』8,9: 1-20.

赤沼智善 & 西尾京雄

1931 「悲華經解題」『国訳一切經』經集部五（東京：大東出版社）
（改訂版[1996]に再録）1-9.

石上和敬

- 1993 「Karunāpundarika研究序説」『インド哲学仏教学研究』1:
21-36.
- 1999 「Karunāpundarikaに見られる釈迦如来の五百願について」
『仏教学』40: (85)-(107).
- 2002 「〈悲華經〉に見られる一音説法について」『木村清孝博士
還暦記念論集 東アジア仏教—その成立と展開』（東京：
春秋社）499-515.
- 2009 「Karunāpundarikaの梵蔵漢資料」『武蔵野大学仏教文化研究
所紀要』25: 1-42.

岩本裕

- 1974 「悲華經（抄）」『仏教聖典選』第六卷（大乘經典 四）（東
京：読売新聞社）203-340

宇治谷祐顕

- 1954 「Karunāpundarikaの阿弥陀仏因願文について」『印仏研』
3-1: 186-190
- 1957 「悲華經の阿弥陀仏本願攷—梵本を依用して」『同朋学報』4:
41-95.
- 1962 「Karunāpundarikaに於ける一、二の問題」『印仏研』10-1:
108-113.
- 1965 「『悲華經』の於ける諸仏本縁と無量寿仏本願文」『真宗研究』
10: 45-57.
- 1965a 「梵蔵対照に依る悲華經所説の無量寿仏本願文について」
『印仏研』13-1: 221-226.
- 1967 「悲華經の婆由比紐Vāyuvīṣṇuと大悲比丘」『印仏研』15-2:
32-37.
- 1968 「悲華經のアミダ仏本生説話考」『印仏研』17-1: 74-80.

1969 『悲華經の研究』（名古屋：文光堂）

1969a 「悲華經のアミダ仏本生説話」『東海仏教』13: 23. (紹介省略)

1971 「書評： *Karuṇāpundarika*」『鈴木学術財団研究年報』5-7
(1968-1970): 85-87.

1971a 「悲華經の檀波羅蜜行について」『印仏研』20-1: 71-75.

1976 「悲華經の浄土」『日仏年報』42: 101-120. (坂本要編『極楽
の世界』（東京：北辰堂、1997）183-198に再録）

畝部俊英

1978 「『無量寿經』における称名思想」『日仏年報』44: 15-30.

小野玄妙

1907 「悲華經の二本生譚」『宗教界』3-5: 29-32. (「二楞生」の筆
名での寄稿)

香川孝雄

1969 「『悲華經』の無諍念本生について」仏教文学研究会編『仏
教文学研究』7: 173-196.

加藤智学

1916 『阿弥陀仏の研究』（東京：無我山房、京都：平楽寺書店）

1919 「『無量寿經』と『悲華經』の対照」『無尽燈』24-11: 30-49.

斉藤舜健

1998 「『大阿弥陀經』の教説構造－阿弥陀仏の寿量をめぐって」
『佛教大学総合研究所紀要』5: 37-55.

佐藤直実

1998 「『阿閼仏国經』と女性」『仏教史学研究』41-1: 37-61.

2005 「大乘經典に引用される阿閼仏信仰の役割」『頼富本宏博士
還暦記念論文集 マンダラの諸相と文化』下（京都：法蔵
館）35-47.

2008 『藏漢訳『阿閼仏国經』の研究』（東京：山喜房仏書林）

真田有美

- 1956 「悲華經について」『日仏年報』21: 1-14.
1957 「悲華經の別出經について」『龍谷大学論集』354: 1-23.
1963 「スタイン氏将来 中央アジア梵文仏典資料について」『龍谷大学 仏教文化研究所紀要』2: 16-26.

色井秀議

- 1962 「阿弥陀經の成立について」『天台学報』5: 17-29.
1978 『浄土念仏源流考』（京都：百華苑）
1986 『阿弥陀經を語る』（東京：山喜房仏書林）

常盤大定

- 1973 『後漢より宋齋に至る 訳経総録』（東京：国書刊行会）（原著は1938年）

長島尚道

- 1981 「阿弥陀仏本願文の変遷－悲華經を中心として」『時宗教学年報』9: 21-36.
1982 「穢土成仏について－*Karuṇāpundarika*を中心として」『時宗教学年報』10: 46-55.
1985 「悲華經における穢土について」『壬生台舜博士頌寿記念 仏教の歴史と思想』（東京：大蔵出版）221-230.

成松芳子（または、紺矢芳子）

- 1975 「悲華經所説の生因願について」『橋本博士退官記念 仏教研究論集』（大阪：清文堂出版）261-272.
1975a 「悲華經における本願文の一考察」『印仏研』23-2: 199-203.
1976 「悲華經における三昧について」『印仏研』24-2: 195-200.
1983 「悲華經における機根の問題」『日仏年報』49: 75-90.（「紺矢芳子」で寄稿）

ナレシ・マントリ

- 1971 「法華經の陀羅尼における女神について」『印仏研』20-1:
152-153.

西尾京雄

- 1931 「悲華經の成立及びその仏身觀」『大谷学報』12-2: 44-62.
1933 「浄土論に於ける二乗種不生に就て」『大谷学報』14-4:
93-126.
1934 「大乘悲分陀利經」『仏書解説大辞典』第七卷（東京：大東
出版社）326-329.

西田龍雄

- 1987 「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『北村
甫教授退官記念論文集 チベットの言語と文化』（東京：
冬樹社）108-169.

吹田隆道

- 1990 「『大本經類』に見る過去仏思想と二つの展開」『仏教大学
仏教文化研究所所報』8: (24)-(19).
1993 「『大本經』に見る仏陀の共通化と法レベル化」『渡辺文麿
博士追悼記念論集 原始仏教と大乘仏教』上（京都：永田
文昌堂）271-283.
1995 「教主としての『城喻經』－厄除け機能の考察と付加物語
の翻訳」『仏教大学総合研究所紀要』2: 107-129.
2003 「二人のシャーキャムニ仏」『佐藤良純教授古稀記念論文集
インド文化と仏教思想の基調と展開』第一卷（東京：山喜
房仏書林）107-118.
2006 「二尊のあわれみ－浄土經典に見る釈迦牟尼讃嘆の文学構
造」『仏教文化研究』50: 1-17.

藤田宏達

- 1970 『原始浄土思想の研究』（東京：岩波書店）

- 1977 「悲華經」『仏典解題辞典 第二版』（東京：春秋社）
365-366.
- 2007 『浄土三部經の研究』（東京：岩波書店）
- 北條竜士
- 2006 「『悲華經』におけるDrāmiḍa-mantrapada」『印仏研』55-1:
(98)-(101).
- 2007 「『悲華經』におけるPūrvayoga」『仏教文化研究』51: (1)-(11).
- 望月信亨
- 1922 「悲華經の弥陀本生説話に就いて」『仏教学雑誌』3-7:
607-620.
- 1930 『浄土教の起源及発達』（東京：共立社）
- 1946 『仏教經典成立史論』（京都：法蔵館）
- 1974 「悲華經」『望月 仏教大辞典 増訂版』第五卷（東京：世
界聖典刊行協会） 4294-4296.
- 山口務
- 1997 「悲華經」『大乘經典解説事典』（東京：北辰堂）232-234.
- 山田龍城
- 1959 『梵語仏典の諸文献—大乘仏教成立論序説 資料篇』（京都：
平楽寺書店）
- 吉元信行
- 1970 「書評：宇治谷祐顕著『悲華經の研究』」『大谷学報』49-3:
85-89.
- 渡辺愛子
- 1985 「悲華經物語」『仏教説話大系29 大乘仏典抄（二） 本願
と浄土』（東京：すずき出版）247-307.
- Dās, Śarat Chandra
- 1898 *Karuṇāpūṇḍarīka*, edited by Śarat Chandra Dās & Śarat Chandra

Śāstri (Calcutta: Buddhist Text Society of India)

de Jong, Jan Willem

1972 “Review: *Karuṇāpūṇḍarika*”, *IJ* 13: 301-313.

1988 “Review: Michael Hahn, *Der Grosse Legendenkranz*”, *IJ* 31: 156-158.

Edgerton, Franklin

1953 *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, vol. I: Grammar (New Haven) (rep. Delhi: Motilal Banarsidass)

1953a *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, vol. II: Dictionary (New Haven) (rep. Delhi: Motilal Banarsidass)

Eimer, Helmut

1999 *The Early Mustang Kanjur Catalogue*, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde HEFT 45 (Wien: Universität Wien)

Fuss, Michael

1995 “Review: *Die Dhāraṇī des Grossen Erbarmens des Bodhisattva Avalokiteśvara mit Tausend Händen und Augen*”, *Buddhist-Christian Studies* 15: 285-288.

Hahn, Michael

1985 *Der Grosse Legendenkranz (Mahajjātakamālā), Eine mittelalterliche buddhistische Legendensammlung aus Nepal*, Nach Vorarbeiten von Gudrun Bühnemann und Michael Hahn, herausgegeben und eingeleitet von Michael Hahn (Wiesbaden: Otto Harrassowitz)

Harrison, Paul

2009 *A Catalogue of the Manuscript Collection of Tabo Monastery, vol. I Sūtra Texts*, Tabo Studies III (Roma: ISTITUTO ITALIANO PER L'AFRICA E L'ORIENTE)

Herrmann-Pfandt, Adelheid

- 2008 *Die LHAN KAR MA, Ein früher Katalog der ins Tibetische übersetzten buddhistischen Texte* (Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften)

Hurvitz, Leon

- 1969 “Review: *Karuṇāpuṇḍarīka*”, *JAOS* 89-3: 651-654.

Inagaki, Hisao

- 1964 “Amida’s Jātaka and His Vows in the *Karuṇāpuṇḍarīka Sūtra*”, *The Shinshugaku* (Journal of Studies in Shin Buddhism) (『真宗学』) 31: (1)-(20).

Kunst, Arnold

- 1969 “Review: *Karuṇāpuṇḍarīka*”, *BSOAS* 32-3: 627-629.

May, Jacques

- 1970 “Review: *Karuṇāpuṇḍarīka*”, *T’oung Pao, Second Series* 56-4/5: 324-334.

Mitra, Rājendralāla

- 1882 *The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal* (Calcutta: The Asiatic Society of Bengal)

Nattier, Jan

- 1991 *Once Upon a Future Time, Studies in a Buddhist Prophecy of Decline* (Berkeley: Asian Humanities Press)

Oguibénine, Boris

- 1996 *Initiation pratique à l’étude du sanskrit bouddhique*, Collection Connaissance des langues (Paris: Picard Éditeur)

Ohnuma, Reiko

- 1997 *Dehadāna: The ‘Gift of the Body’ in Indian Buddhist Narrative Literature*, A dissertation submitted in partial fulfillment of the

requirements for the degree of Doctor of Philosophy in The University of Michigan.

- 2007 *Head, Eyes, Flesh, and Blood, Giving Away the Body in Indian Buddhist Literature* (New York: Columbia University Press)

Reis-Habito, Maria Dorothea

- 1993 *Die Dhāraṇī des Grossen Erbarmens des Bodhisattva Avalokiteśvara mit Tausend Händen und Augen*, Monumenta Serica Monograph Series XXVII (Nettetal: Steyler Verlag)

Ricca, Franco & Lo Bue, Erberto

- 1993 *The Great Stupa of Gyantse, A Complete Tibetan Pantheon of the Fifteenth Century* (London: Serindia Publications)

Rhi, Juhyung

- 2008 “Some Textual Parallels for Gandhāran Art: Fasting Buddhas, *Lalitavistara*, and *Karuṇāpundarīka*”, *JIAS* 29-1: 125-153.

Salomon, Richard

- 2000 “Review: *Initiation pratique à l’étude du sanskrit bouddhique*”, *JAOS* 120-3: 463-464.

Tauscher, Helmut

- 2008 *Catalogue of the Gondhla Proto-Kanjur*, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde HEFT 72 (Wien: Universität Wien)

Terakawa, Shunsho

- 1969 *The Karuṇāpundarīka: chapters V and VI*, A dissertation in Oriental Studies, Presented to the Faculty of the Graduate School of the University of Pennsylvania in Partial Fulfillment of the Requirements for the degree of Doctor of Philosophy.

Tropper, Kurt

- 2005 *Die Jātaḥa-Inschriften im SKOR LAM CHEN MO des Klosters
ZHA LU*, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde
HEFT 63 (Wien: Universität Wien)
- von Hinüber, Oskar
- 2008 “Review: Ohnuma, Reiko, *Head, Eyes, Flesh, and Blood*”, *IJ* 51:
85-90.
- Weiler, Royal W.
- 1956 *The Karuṇāpundarīka: chapters I and II*, A dissertation in
Oriental Studies, Presented to the Faculty of the Graduate School
of the University of Pennsylvania in Partial Fulfillment of the
Requirements for the degree of Doctor of Philosophy.
- Weller, Friedrich
- 1971 “Review: *Karuṇāpundarīka*”, *OLZ* 66: 179-184.
- Yamada, Isshi
- 1968a *Karuṇāpundarīka, edited with Introduction and Notes*, vol.1
(London: School of Oriental and African Studies, University of
London)
- 1968b *ibid.*, vol.2